

お寺にある素敵なものを、発信していきたい

ユジュ

第三号

平成 21 年 7 月 15 日発行

ユジュ

「YUJ」とは「瑜伽」とも書き、サンスクリット語で、「結ぶ、繋ぐ」を意味します。YUJを手にとった方とお寺が良い縁で結ばれますように。

弘法大師ゆかりの 四国遍路と金倉寺の 意外な関係

金倉寺の縁起と言えば智証大師と乃木將軍のお話。どうして四国遍路のお寺なのでしょう。

四国遍路といえば弘法大師ゆかりのお寺、どうして金倉寺が四国遍路のお寺なのか、という声も時々聞かれます。例えば、お遍路さんが金倉寺で大師堂と思いついてるの、は、正しくは「祖師堂」であり、五大師（智証大師・弘法大師・伝教大師・天

四国

遍路

台大師・神変大菩薩）を安置しており、弘法大師のみを安置する「大師堂」ではありません。ではどうして金倉寺が四国遍路のお寺なのでしょう。ひとつは金倉寺で誕生された智証大師は弘法大師の甥であり、寺伝によれば智証大師三歳の時、

弘法大師がその非凡なる才を見抜き、「智慧童子」と名づけ、将来高野山に来ることを期待した、というのです。智証大師が弘法大師の甥であったことは事実ですが、智証大師を祖師と仰ぐ天台寺門宗はかならずしもそのようには言っています。そこでもうひとつの可能性が考えられます。実は四国遍路そのものが弘法大師も修行をした修験僧の修行場なのです。江戸時代には全ての修験僧は天台系（本山派）、真言系（当山派）のどちらかに所属せねばなりません

でした。その天台系修験の開祖が、智証大師です。つまり、天台系修験の四国の中心地がここ金倉寺であったのです。

現在でもその伝統は残っており、弘法大師も修行をした石鎚山を国峯道場として、七月七日に峰入りをを行い、九月の大祭では盛大な採燈護摩を修しております。是非この金倉寺に息づく修験の香りを感じて下さい。

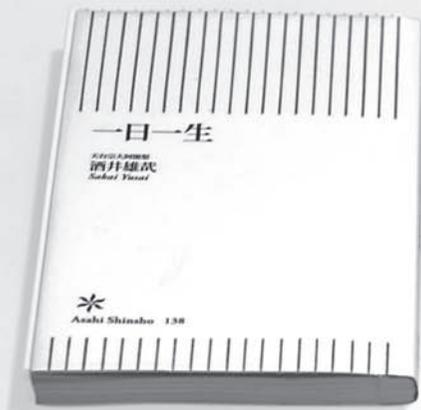


『四国遍路の寺 上』
五来重 角川ソフィア文庫

石鎚山天狗岳

金倉寺文庫

A302 一日一生
酒井雄哉 朝日新書



千日回峰行を二度満行された酒井雄哉阿闍梨が、側で語りかけるように綴られたエッセイ。特別な言葉で語られている訳ではないが、心に染みてくるのは、酒井阿闍梨の人柄によるものではないでしょうか。日常をちょっと豊かにさせてくれる、そんな一冊です。

E105 坂の上の雲五
司馬遼太郎 文春文庫



日露戦争を取り扱った司馬遼太郎の代表的名作。NHKスペシャルドラマの放映も今冬よりスタートし、ますます注目が集まります。秋山兄弟や正岡子規の活躍もさることながら、この五巻では日露戦争の名場面、乃木將軍とステッセル將軍の水師營の会見が描かれています。

金倉寺では壇信徒の皆さん、またこれまで金倉寺に縁のなかつた方にも気軽に足を運んでいただこうと、書籍の閲覧、貸出を行っています。

金倉寺本堂脇、寺務所の正面廊下にポツンと置かれた書棚：これが実は金倉寺文庫です。

文庫は仏教や金倉寺にまつわることを中心に、歴史や小説、漫画、雑誌、映画など幅広く揃えています。

こういった書籍があるか、その一例を紹介しますと、いま皆さんが手に取ってるYUJ、その記事の最後に掲載されている写真が金倉寺文庫にある本で、その本を参考に記事を書いたことを意味しています。

平成二十一年七月一日現在での登録文庫数は二百三十九冊と少ないですが、これからも鋭意取り組んでいきたいと思っておりますので、この記事を読まれた皆さんのご利用を心よりお待ちしております。

【ご利用方法】

- 一、利用される際は本堂に一言お声かけ下さい。
- 二、本を閲覧する際は本堂をご利用下さい。
- 三、初めて本の貸出を希望する方は、本堂にある用紙に名前と連絡先を記入して下さい。
- 四、本の貸出は一人一冊、一週間までです。「図書貸し出し帳」に必要事項を記入し、かならず一週間以内に返却して下さい。返却の際、返却日の記入をお願いします。

円珍・乃木

まつり

今年も九月五日(土)・六日(日)に、恒例の「円珍乃木祭」が開催されます。金倉寺の法要はもちろん、地元実行委員会の皆さんの協力のもと、こども達による相撲大会や剣道大会など、数々の催しが企画されています。皆さんのお越しをお待ちしております。



万灯会

円珍乃木祭の初日にあたる九月五日(土)、皆さんから仏様に供養される沢山の口ウソクが夜の金倉寺を彩ります。山門から本堂、祖師堂までの参道を彩る灯明のゆらめきが作る幻想的な世界を是非ご覧下さい。また本堂では十九時より法要が行われます。本堂からの読経が、さらにこの幻想的な世界を際立たせることでしよう。

採燈護摩

円珍乃木祭の二日目の九月六日(日)、金倉寺において採燈護摩が修せられます。屋外に組まれた大きな護摩壇に火が灯せられた時の天を覆わんばかりの煙、煌々と輝く炭の上を素足の行者が渡る火渡りなど、屋外で行われる採燈護摩ならではのダイナミックな法要を是非ご覧下さい。なお、火渡りは一般の方も三百円にて参加できます。

金倉寺の行事

七ヶ所まいり

その他の二〇〇九年八月以降の行事をご紹介します。

八月二十三日(日)七時より現世利益を与え、子供の守り神としても信仰される地藏菩薩の縁日にあわせ「金倉寺地藏縁日法要」が行われます。また同二十八日(金)には初盆の方々の追善回向と燈籠供養の「金倉寺燈籠供養」が行われます。

ここ金倉寺を含む四国霊場七十一番〜七十七番までの霊場を一日で巡ることを「七ヶ所まいり」といい、『四国八十八番社名勝』という絵図に「足よはき人は此印七り七ヶ所をめぐれば四国巡拜にじゅんずといふ」と紹介されています。善通寺市周辺では古来よりお彼岸の中日に七ヶ所まいりをするという習慣があつたそうで、弘法大師信仰として、また心願成就などを願い巡拜されたことでしょうか。しかし、現在ではその巡拜団を見ることもなくなりました。

天台寺門宗の祖であり、金倉寺で誕生された智証大師の命日にあわせ、その前日である十月二十八日(水)に「智証大師御正忌」が行われます。

そこで、金倉寺では定期的な七ヶ所まいり巡拜団を組織したいと考えています。まずは、今秋に手探りながらも巡拜を行ってみたいと考えています。昔の巡拜団をご存知の方、また七ヶ所まいりに興味がある方は、金倉寺までご連絡下さい。

また天台宗の祖である天台大師の命日にあわせ、その前日である十二月二十三日(水)に「天台大師御報恩講」が行われます。両法要とも、天台宗にとつて多大な貢献をされた両大師の御遺徳を偲び、法要を厳修いたします。

また天台宗の祖である天台大師の命日にあわせ、その前日である十二月二十三日(水)に「天台大師御報恩講」が行われます。両法要とも、天台宗にとつて多大な貢献をされた両大師の御遺徳を偲び、法要を厳修いたします。

「気になる？」

「気になる！」



その三、お茶と僧

私たちが毎日のように飲んでいるお茶。そのお茶と僧に深い関係があることをご存知でしょうか。そもそも、「お茶を飲む」という風習は中国で始まったもの。日本に伝わったのは聖武天皇の時代、僧侶が仏教を学ぶために唐の国へ留学した際、茶の葉や種を持ち帰ってきたのがはじまりとされています。また最澄ゆかりの天津日吉神社近くには、最澄が持ち帰った茶の実を植えた、最古とされる茶園が残っています。その後、遣唐使の廃止により茶文化は停滞したものの、一一九一年、禅

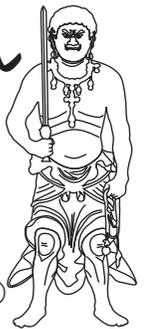
を研究するために宋へ渡っていた栄西禪師が、茶の種子を持ち帰り抹茶の飲み方を伝えたことで、禅とともに茶の儀式および茶の思想も急速に広まっていったようです。

一方、私たちが普段飲むことの多い煎茶の始まりは江戸時代といわれており、当時最新の中国文法であったことなどから、形式にとらわれずに煎茶を飲みながら清談を交わすいわゆる「煎茶趣味」が文人の間で広まったとのこと。煎茶の開祖も、禅宗一つ黄檗宗の開祖である隠元とされていることから、やはりお茶と僧には深いつながりがあるといつてよいでしょう。一度、みなさんもそんな歴史に思いを馳せながらお茶を飲んでみてはいかがでしょうか。



『茶の本』岡倉三三 岩波文庫

小僧さんの自習室



その3. 円珍さん②

仁徳は円珍さんを義真和尚に託す時、次のような推薦文を添えました。

「兄は器宇宏遠にして誠に凡流に非ず、吾れはこれ短綆の量、その深淺測り難し。すべからく業を碩学に請うて彼の大成を期せしむべし。」

仁徳は円珍さんの器が深く、自分の短い釣瓶のような力では、その才能を汲出すことができない。そこで比叡山座主義真和尚に指導して貰いたい、と言うのです。

仁徳の想いも通じ、円珍さんは義真和尚の下で四年間の勉学と修行に励み、見事十九歳で僧とな

るための国家試験に合格します。そして比叡山での十二年の籠山行に入ることになるのです。

円珍さんの比叡山での修行は主に密教を中心としたものでした。そんな籠山五年目の冬、石室で座禅をしていた円珍さんの前に突然金色に輝く異相の人が現れ、「私の姿を図画し、丁寧な拝みなさい」と言いました。円珍さんが「あなたはどなたですか？」と尋ねると、「私は金色不動明王である。あなたの人格が極めて高く仏法を尊ぶ心が深いため、私はあなたを守護しましょう。」と答えました。この時図画されたものが園城寺に伝わる「不動明王像（黄不動尊）」と言われています。

(次回に続く)



『智証大師 円珍』小林隆彰 東方出版

編集後記

哲済 山行きたいーっ！

香祥 いやいや、今年は石鐘山やら大峯やら、たくさん行ってるやん。

哲済 あかんあかん！煩惱の塊や。もつと修行せな。滝に打たれてくるっ！

香祥 滝っていつてもねこの近くにいい行場はないのかしら。

哲済 やっぱ四国やつたら石鐘山やん。今年は三回行くゆーてるし。今から石鐘行つてきまーっす。止めてもあかんので、修験は男の世界や。

香祥 止めても無駄やから、どうぞ、いつてらっしゃい。

哲済 えらい冷たい！なんやここに居てるんが既に滝行やん。

平成二二年七月十五日発行
編集・発行 金倉寺
発行人 村上法照
お問い合わせは
〒七六五-0031
香川県善通寺市金蔵寺町二六〇
TEL 〇八七七一六二一〇八四五
yuj@kagawa-konzouji.or.jp